



PLES Report 50

英文法の棚卸：5文型はなぜ問題か

田中茂範・阿部一

(PEN言語教育サービス)

はじめに

もともと「棚卸」といえば、決算の際に、商品を棚からおろして、その数量を確認し、品質を吟味したうえでその価格を評定することをいう。「英文法の棚卸」も、同様に、英文法に含まれる項目の価値を改めて確認するという意味でこの記事のタイトルにしている。実は、この棚卸には派生的な用法もあり、人物やモノの欠点を数え上げて、言い立てる際にも「A君の棚卸をする」といった具合に使うことができる。この「英文法の棚卸」というコーナーは、この派生的な用法に近い意味で、現行の学習英文法の問題点を指摘するという意図がある。

ここで棚卸の対象となるのは「5文型」である。5文型論の是非については、古くからさまざまな議論が行われている。しかし、5文型という考え方が現在もなお英語教育の対象になっているのは厳然たる事実である。

説明するまでもないが、5文型といえば、S（主語）、V（動詞）、O（目的語）、C（補語）という記号を使って英文をタイプ分けする方法である。あえて復習しておけば、以下がその例である。

S V：第1文型 John works hard.

S V C：第2文型 John is honest and helpful.

S V O：第3文型 Mary bought a gift.

S V O O：第4文型 Mary gave John the gift.

S V O C：第5文型 Mary made John confident and proud.

例えば、John works hard. という文は、John works. の2つの要素に注目し、S (John) V (works) の第一文型になる。一方、John is honest and helpful. の honest and helpful は補語 (C) と見なされ、SVC の第二文型になる。このように、英語のあらゆる文とまではいわないまでも、ほとんどの文をこの5つのタイプの文型で説明しようというのが5文型論である。5文型の発想は、英語の語順の指導において一定の役割を果たしてきた。5文型論の説明力については、問題があると考える教師が増えてきているが、一方で、多くの英語教師は、今でも、5文型論の有用性を信じて疑わない人が少なくないように思う。

5文型の考え方のメリットとデメリットを考慮するなら、生徒の英語力を高める方法と

してはディメリットのほうが大きいというのがわれわれの判断である。5文型論の有用性は限定的であり、SVCといった「メタ言語」で英文を説明する方法は学習者に不必要な負荷をかけることになるからである。以前、500名ほどの大学生を対象に、5文型の意義について調査したことがある。それによると、その意義を認めたのは、3パーセントほどで、圧倒的な学生は、5文型についてネガティブな捉え方をしている。筆者らは、表現のための文法を指導するには、英語教師のビリーフの中から、5文型の発想を放擲しなければならないという立場である。

現行の文科省指導要領(高等学校編)でも2022年より使用される指導要領(高等学校編)でも、5文型に基づく記述はなく、「高頻度で使う重要な構文を扱うこと」と簡明に示されている。これは見識である。がしかし、学校現場や参考書・問題集を作成する現場では、5文型を取り扱っている場合が多い。そこで、本稿では、学習英文法の棚卸として5文型論の本質的な問題について述べておきたい。

不可欠な共演情報は何か

まず、いわゆる be 動詞を使った文をみてみよう。「ジョンはここにいる」の意を表す John is here. は、S V の第1文型とみなされる。その理由は here が副詞であり、5文型論の要素としてカウントされないからである。一方、John is happy. になると S V C の第2文型と見なされる。happy は John という主語の主格補語であるというのが理由である。しかし、be は「存在」の意味を表し、存在と場所は不可分の関係(何かはどこかに存在するという関係)にある。すなわち、John is here. では「ここ」という場所と「ジョンが存在する」ということは分かちがたく結びついている。John is. は I think; therefore, I am. (我思う故に我在り) という文が存在するように、完全に非文であるというわけでないが、著しく不自然である。

be 動詞の意味論に着眼するなら、John is here. が be 動詞のプロトタイプ(原型的用法)であり、John is happy. は happy という心的状態としての「場」を表していると考えることができる。すると、John is here. も John is happy. も「何かはどこかに在る」という be の要件を満たす表現であり、場所情報を端的に表す John is here. は John is happy. よりも基本的な(basic)用法であるといえる。John is running. とて、「ジョンは走るという連続的な状態(場)に在る」と解釈すれば、ここで紹介した3つの文を連続体で捉えることが可能である。here が副詞だからという理由で、John is here. と John is happy. の間に文型的な差異を認めなければならない5文型論には問題があることは明らかである。

補語と目的語の意味

次に、いわゆる第5文型(SVOC)に注目してみよう。Mary made John confident. がその例である。5文型論でいえば、動詞+目的語+補語の配列になっている。しかし、ここでいう目的語は Mary made a pie. の目的語と同じであろうか。Mary made a pie. の a pie は「動作が作用する対象」を表す語としての目的語である。しかし、Mary made John という言い

方は意味を成さない。つまり、John は make の目的語ではないのである。では、何の目的語であろうか。同様に、confident は補語と呼ばれるが、それは Mary の補語ではない。そうではなく、John の補語である。そこで、「目的格補語」なる用語が使われることになる。しかし、この「目的格補語」とは、そもそもどういう補語であろうか。主格補語と目的格補語を同じCで表すことは有意味なことかという問題である。

さらにいえば、学校文法によると、S V O CのCは品詞論的に名詞に限定されない。I had a taxi waiting outside.も第5文型と見なされる。had(V) a taxi (O) waiting (C) ということである。このように、名詞情報だけでなく動詞情報（現在分詞形だけでなく過去分詞形、原形も含まれる）までもが補語（C）と呼ばれることになる。すると、目的格補語というものの意味が益々わからないものになってしまう。

Mary made John confident.は John is confident.がS V Cの関係にあるように、この John confident も John BE confident と考えれば、confident は John（この場合は目的語）の「補語」である、という論が成り立つ。しかし、John had a taxi waiting (outside).の waiting を補語と呼ぶ場合では、事情が異なる。なぜなら、A taxi is waiting (outside)の waiting は補語ではなく、動詞であり、SV 構文と見なされるからである。ここでは、主格補語になぞらえた目的格補語という概念装置はうまく機能しない。

動詞 imagine の用例を見てみよう。He imagined [he's sitting on a cloud].では[he's sitting on a cloud]がOになり、I could not imagine [living with my girlfriend].では、[living with my girlfriend]がOになる。しかし、この2つの文は同じS V Oの第三文型であるという情報がどういう教育的な意味を持つのだろうか。She imagined the president starting a war.になると、the president が目的語で、starting a war が補語となり、S V O Cの第五文型になると説明される。He imagined a new office.の a new office は imagine のOである。しかし、She imagined the president starting a war. の the president は imagine のOにはなりえない。むしろ、imagine の目的語は[the president starting a war]ということである。

目的語という用語についていうなら、He imagined he's sitting on a cloud.の[he's sitting on a cloud]も I assume that the Japanese government will boost its economy.の that 節も「目的語」である。それは、imagine や assume の目的語（O）である。I don't know who that woman is.の who that woman is もOである。しかし、ここでは「節」という一段レベルの高い要素が「目的語」とみなされる。すなわち、節を開けば、that the Japanese government will boost its economy の節内においてS V Oの配列がみられる。では、boost のO(its economy) と assume のO(that the Japanese government will boost its economy) は同じ性質のOであろうか、という問題が出てくる。

第4文型の問題

この目的語（O）は何を表すのかという問題は、S V O Oの文型を考えた場合、さらに混乱する。Mary gave John the gift. がその代表例だが、John も the gift もOと見なされる。一

応、John は間接目的語、the gift は直接目的語と呼ばれ、間接目的語は「受け手」といわれる。すなわち、Mary gave John the gift. は Mary gave the gift to John. という SVO の構文に置き換えることができるように、ジョンはメアリが差し出したギフトの受け手ということになる。ただ、この2つのOは、Mary made a pie. の a pie をOと呼ぶ場合とは事情が異なる。Mary gave the gift. や Mary gave John. という表現が成り立たないからである。さらにいうと、Mary gave the gift の場合は to John、Mary gave John の場合は the gift が不可欠な共演情報となる。不可欠な情報を副詞として退け、Mary gave the gift to John. を第3文型と見なすこと自体無理がある。

SVOOについては、もっと厄介な問題がある。John gave Mary a headache. という用例をみてみよう。これは5文型論でいうならSVOOの第4文型である。しかし、ここでの「間接目的語」とみなされるMaryは「受け手」では決してない。敢えて言えばMaryは「経験主」である。頭痛をジョンが持っていて、それをメアリに譲渡したというのは解釈上ありえないからである。ここでの論点を補強するのに Overwork gave John a heart attack. を考慮するといいたいだろう。働きすぎが心筋梗塞も元の所有者ということとはありえない。むしろ、John had a heart attack because of overwork. と解釈すべきである。John gave a headache to Mary. がありえないように、Overwork gave a heart attack to John. もありえない。だとすれば、表面上の第四文型の第三文型への置き換えだとか、「間接目的語」という用語は、言語表現の実態を誤った方向に導く分析になる。

「目的語」のさらなる考察

John made grapes into wine. と John made wine out of grapes. を比べてみよう。John made wine. はそれ自体、有意味な文であり、この wine を make の目的語と見なすことができる。しかし、構文的に同一の John made grapes into wine. はどうであろうか。いうまでもなく、John made grapes のままでは意味を成さない。そこで、この grapes は make の目的語ではありえないことになる。

ここで挙げた John made grapes into wine. は5文型論では扱えない。それだけではない。We compared John Lennon with Bob Dylan. はどういう文型だろうか。John Lennon が compare の目的語にはなりえない。比較というものは、2つの要素を含むからである。He blew a handkerchief off the table. や She put the cat out. なども同様に、5文型論では説明ができない。He blew a handkerchief. という言い方や She put the cat. という言い方は意味を成さないからである。

動詞の構文的可能性

主語、動詞、目的語、補語という用語が指す対象（物事）は、突き詰めれば、動詞を中軸に据えた共演情報と考えるべきであろう。動詞の意味が事態構成のために必要とする情報のことである。

例えば、ask という動詞の場合、「情報内容を求める（尋ねる、問う）」という意味合いだと、そのスクリプトには、「誰が」「誰に」「何を」という共演情報が含まれる。そして、それを構文的に配置させると、次のような可能性（構文的可能性）がある。

スクリプト：(誰が)、誰に、何を、ask (尋ねる)

構文：V + α (α に名詞句や節がくる)

- ・動詞＋名詞 She asked my name. 彼女は私の名前を尋ねた。
- ・動詞＋名詞＋名詞 She asked me a couple of personal questions. 彼女は私に 2、3 の個人的な質問をした。
- ・動詞＋wh-節 She asked where she could get a taxi. 彼女はどこでタクシーに乗れるか尋ねた。
- ・動詞＋名詞＋wh [if] 節 Ask your father if you can use his car. お父さんに車を使っていいか聞きなさい。

また、ask には「物事を求める（頼む、求める）」という意味合いがあり、そのスクリプトには、やはり「誰が」「誰に」「何を」が含まれる。

スクリプト：(誰が)、誰に、何を、ask (頼む)

構文：V + α (α に名詞句や他の句がくる)

- ・動詞＋名詞 She asked my advice. 彼女は私にアドバイスを求めた。
- ・動詞＋名詞＋前置詞句 Ask the doctor for a reference. 参考までにお医者さんに聞きなさい。
- ・動詞＋名詞＋名詞 May I ask you a favor? お願いしていい？
- ・動詞＋名詞＋ to do We asked the audience to be quiet. 聴衆に静かにするように頼んだ。

ここでいうスクリプトは、日本語の「尋ねる」や「頼む」と共通している。そこで、共演情報については、学習者は、英語を話す以前にわかっていることになる。しかし、その共演情報をどう配置するかという際に日本語と英語とでは違いがでてくる。それが構文的可能性という考え方である。

おわりに

以上、我が国の学校英文法の常識とされた 5 文型論は、言語事象の説明力を持たないばかりか、英語表現を歪んだ形で理解させるように生徒を誘導してしまう。John made Mary a good wife. と John made Mary a good husband. の比較においても、表面的には「名詞＋名詞」の形になっているが、意味解釈上は全く異なる構文である。John made Mary a good wife. を S V O C、John made Mary a good husband. を S V O O と特徴づけるであろうが、その根

拠になっているのは、意味解釈である。前者は John made [Mary BE a good wife] ということであり、後者は John made [Mary HAVE a good husband] という解釈である。そして BE か HAVE かの選択は、共演情報を使っての事態構成の過程で自ずと定まってくる。

なお、動詞の意味に着眼して、動詞 + α を基本形とみなし、 α の値を分類すれば、以下の 8 通りの動詞の構文可能性があることがわかる。

タイプ A: 動詞 + α (0)

α の値が 0 (何もない) 構文

タイプ B: 動詞 + α (名詞 / 形容詞 / 副詞 / 前置詞句)

α の値に、名詞、形容詞、副詞、前置詞句のいずれか「ひとつ」の情報が含まれる構文

タイプ C: 動詞 + α (名詞 + 名詞)

α の値に「名詞 + 名詞」の情報が含まれる構文

タイプ D: 動詞 + α (名詞 + 形容詞 / 副詞 / 前置詞句)

α の値に名詞と、形容詞 / 副詞 / 前置詞句のいずれかが含まれる構文

タイプ E: 動詞 + α (to do / doing / done / do)

α の値に do / to do / doing / done のいずれかひとつが含まれる構文

タイプ F: 動詞 + α (名詞 + to do / doing / done / do)

α の値に名詞と、to do / doing / done のいずれかが含まれる構文

タイプ G: 動詞 + α (that 節 / wh 節)

α の値に that 節または wh 節が含まれる構文

タイプ H: 動詞 + α (名詞 + that 節 / wh 節)

α の値に名詞と、that 節または wh 節が含まれる構文

この 8 つの構文タイプは、本稿で指摘した問題に抵触することなく、英語の文の特徴を記述するものである。詳細については稿を改めたい。